

漢法苞徳塾資料	No. 012
区分	診断・望診
タイトル	色の診断論的な意味について
著者	八木素萌
作成日	

◇診断学的な色調の意のみについて記述する。

清・呉謙の『四診心法要訣』の記述を主として引用しながら説明する。「蒙色十則」に紹介した諸書も、この問題を詳細に論じているので学習して欲しい。この問題も『内経』『難経』『傷寒論』特に『内経』の論述が土台となっているものである。

◇主客について

「……蔵色ヲ主ト為シ・時色ヲ客ト為ス・春ハ青・夏ハ赤・秋ハ白・冬ハ黒・長夏ト四季ハ色黄ナルヲ常則トス・客ノ勝ルハ善ナルコトヲ主サドリ・主ノ勝ルハ悪ナルコトヲ主サドル。……」

此处では季節の色と臓の色との関係を、客と主人の関係になぞらえて論じている。客が主人よりも大切にされているのは良いもてなしであるが、主人の方が客人よりも大きな顔をした振る舞いをしてるのは手厚いもてなしとは言えない、この事を例に、季節の色が主で臓の色は従である色調は良好であるが、臓色が主となっているのは凶である、という事を示していると言う。

注 四季

春夏秋冬の各季節には次の季節に移行する前に十八日間の土用が設定されている。故に土用は一年に四回在るわけである。春の季（すえ）・夏の季（すえ）・秋の季（すえ）・冬の季（すえ）であるので四季という。

◇五臓の色

「……天ニ五氣アリテ人ノ鼻ニ入りテ食<ヤシ>ナイ・五蔵ニ蔵<カク>レテ  
上ニ面頤ヲ華<ハエ>シム、肝ハ青・心ハ赤・脾ノ蔵色ハ黄・肺ハ白・腎ハ黒ナルハ、  
五蔵ノ常ナルモノナリ……」

「天の五氣」とは風・暑・湿・燥・寒を言う。風＝東・暑＝南・湿＝中央・燥＝西・寒＝北に配当されていて、それぞれが春・夏・長夏・秋・冬の季節の「カゼ」であり、春風は東から暖かさを・夏風は南から暑さを・秋風は西から涼燥しさを・冬風は北から寒さをもたらしていると言う認識なのである。この「気」は、四方八方から吹き付けてくる単なる「カゼ」では無い。その季節の変動がもたらす、人体へのあらゆる影響を含む概念であるから「気」なのである。その様な形で「天」は人を

養っている。それは口から胃に入っていく「五穀」は「地ノ養ナイ」、「五気」は鼻から肺に入っていく「天ノ養ナイ」という認識である。原注には「風氣入肝・暑氣入心・湿氣入脾・燥氣入肺・寒氣入腎・蔵於人之五臓・蘊其精氣・上華於面・肝之精華・化為色青・心之精華・化為色赤・脾之精華・化為色黄・肺之精華・化為色白・腎之精華・化為色黒也」となっている。

ここで大切な事は、風=木・暑=火・湿=土・燥=金・寒=水と言う「五気」の五行性が臓の五行性に入って、それぞれを食<ヤシ>なって、その結果としての「精華」が顔面に反映しているのが「五色」だと言う認識であり思想である。また「地気」の養いを「精華」たらしめているのが「五気」であるとの認識が隠れていることを見落としてはならないであろう。

#### ◇色脈相合と色脈矛盾

「……色脈ノ相イニ合ストハ、青ニハ弦・赤ニハ洪・黄ニハ緩・白ニハ浮・黒ニハ沈ナレバ  
乃ハチ平ナリ、已ニ其ノ色見ワレテ其ノ脈ヲ得ズシテ、剋ヲ得ルトキハ死・生ヲ得ルトキハ  
生クナリ……」

色の指し示している意味に相応した脈状であるならば「平」=健康に問題が無いであるが、この色の意味する五臓・五気と、脈の意味する生理的病理的なものとの間に、相剋的な関係が見られれば死にいたる病である事を意味しているのであるが、相生的な関係を示している場合には死ぬことは無い、と言うのである。

#### ◇病の新旧と色脈

「……新病ハ脈奪ワレテ其ノ色奪ワレズ、久病ハ色奪ワレテ其ノ脈奪ワレズ、新病ハ已ミ易クシテ  
色脈奪ワレズ、久病ハ治シ難クシテ色脈俱ニ奪ワルナリ……」

新しい病は脈には病的な変化があっても、顔色など皮膚の色には病的変化はあまり無いか、色にも脈にもさしたる変化が無い時には治療し易いものかである、しかし、慢性化した病では色には病的な変化があっても脈には病的変化があまりあらわれていない、慢性化した病で治療が難しいものでは、色も脈にも病的な変化が続いているものである。と言うのである。原注には「……脈奪者・脈微小也・色奪者・色不澤也……」「……新病正受邪制・故脈奪也・邪受未久・故色不奪也・久病受邪已久・故色奪也・久病不進・故脈不奪也・若新病而色脈俱不奪・則正不衰而邪不盛也・故曰易已・久病色脈俱奪・則正已衰而邪方盛也・故曰難治」とある。

#### ◇色と気

「……色ハ皮外ニ見ワレ、気ハ皮中ニ含マレテ、内光リ外澤アレバ、気色ハ相融ナリ、  
色有リテ気無クバ病マズトモ命傾ク、気有ルモ色無キモノハ、困スト雖ドモ凶ナラズ。……」

原注には「……青黄赤白黒・顕然彰於皮之外者五色也・隠然含於皮之中者五気也・内光灼々若動・

従紋路中映出外澤如玉・不浮光油亮者・則為氣色並至・相生無病之容状也・若外見五色・内無含映・則為有色無氣・経曰・色至氣不至者死・凡四時五藏五部五官百病・見之皆死・故雖不病命必傾也・若外色淺淡不澤・而内含光氣映出・則為有氣無色・経曰・氣至色不至者生・凡四時五藏五部五官百病・見之皆生・故雖病困而不凶也」と言う。

「油亮」……テラテラに光る様子・テリのある光りの様。

「灼々」……キラキラ光る様子

「五部」……五藏が生理的反応をシンボライズして現わす部位の事

一般的には<眼は肝の竅・鼻は肺の竅・唇は脾の竅・舌は心の竅・耳は腎の竅>と言われたり、<左頬は肝・右頬は肺・額は心・顎は腎・鼻は脾>と言われたり、この他にも五臓を意味する部位に関する説は、まだ幾つかある。

#### ◇気色並至の色

「……縞裏雄黄・脾状並臻・縞裏紅肺・縞裏朱心・縞裏黒赤・紫艶腎縁・縞裏藍赤・石青属肝……」

白い絹布に雄黄を包んだような色（脾）

白い絹布に紅を包んだ様な色（肺）

朱を包んだような色（心）

包んだ白い絹布から黒いものの奥から赤味が映えて表出する感じの色（腎）

包んだ白い絹布から藍色の奥に映えて赤みが表出する感じの色（肝）

これ等が気色並至の状態の色であると言う。

#### ◇病症と色

「……黄赤風熱・青白主寒・青黒為痛・甚則痺攣・恍白脱血・微黒水寒・痿黄諸虚・顛赤劳纏……」

（黄赤ハ風熱、青白ハ寒ヲ主サドリ、青黒ハ痛ト為ス、甚ダシイトキハ痺攣シ、恍白ハ脱血・微黒ハ水寒、痿黄ハ諸々ノ虚、顛ノ赤キハ劳ノ纏ヒナリ）、色が示している病症を記述している。

#### ◇沈濁晦暗

「……沈濁ト晦暗トハ内ニ久シクシテ重シ・浮澤ニシテ明顕ナルハ外ノ新ニシテ軽シ、ソノ病甚ダシカラズバ半澤半明ナリ、雲散スルモノハ易治、搏聚スルモノハ難攻ナラン……」

「内久而重」……内傷性の病で久しい慢性的な経過をとり重い病であることを示している事を言う。

「外新而軽」……外感性の新しい病であって軽いものと言う。

ここでの軽重とは症状の激易を比較しているものではない、本質的な意味での病の深さを対比して言っている。

## ◇臍色の好悪

『素問』『靈樞』などの記述は表現用語は違っていても、内容的には同一の事を述べている。つまり五臓の本来の色は、これまでの記述に見られるように、肝は青・心は赤・脾は黄・肺は白・腎は黒であるが、「気色並至」つまり<「気」のある色>・<客色と主色の関係が良好な色>・<内から匂い出てくる光り輝きを帯びている色>でなくては、健康的な好ましい色とは言えない。これを例えば

- a. 「白は鷺鳥の羽のような白が良く、乾燥し過ぎている古い塩の色のようなものや、枯れた古い骨の白さのような白は死色である」
- b. 「青は碧玉の色や蔦のからんだ壁の蔦の青さのような色が良い、藍の青さのような色は良くない」
- c. 「黄は薄い絹布に包まれている硫黄の色が布越しに見える時の色のようなものは良いが、乾いた粘土の黄色のようなものは死色である。」
- d. 「黒は重ね塗りの漆の色や烏の羽の色などのような黒さは良い、然し、墨字の乾燥して古いものの黒さや、ススの黒さや、死んだ黒土のような黒さや、乾いたコケの色のような黒さは死色である」
- e. 「赤は薄い絹布に包まれている朱の色を布越しに見るような紅色の赤さは良いが、死血のような色の赤味は、死色である」

などの様に言う。つまり、奥行のある色で艶・輝き・華がある色は良いが、浅くくすんで艶も華も無い色は死色である、こう言う認識である。

## ◇凶色

「……黒庭ニ赤顴ニ出デテ拇指ノ如トクバ、病小愈スト雖ドモ亦必ズ卒死セン、脣面ノ黒青、五官ノ黒起、擦シテ汗粉残ッテ白色、ハ皆死セン……」

「庭」とは「天庭」とも言い、「印堂」穴の上を「闕上」と言うが、此処から髪際までを「庭」と言う。「顴」は頬骨を「顴骨」と言うが下マブタを「臥蚕」と言うが、この「臥蚕」のすぐ下の部分で「頬」はこれよりも外側である。「面」は顔面中央部で掌で隠す事が出来る範囲の事である、鼻の事を「面王」と言うのも、この事と関連している。「五官」は感覚器の事では無い、五臓をシンボライズしている五つの部位の事で「五部」と同義である。

死色の黒色が額の中央部に出、死色の赤が頬の正面の部位に出る、これが丁度「親指腹」位の大きさであれば、かりに病気が少しばかりの間治癒しているように見えても、まもなく必ず突然に死を迎える事になる、脣や「面」の部分に黒青の色が出たり、「五官」の部位に黒い色が現われたり、汗が乾いた粉のようなものを擦過して払っても白い粉が残っている様な状態で白い、これらは凶徴であると言う。